

四、樂清淨心

一、第三に、樂清淨心について云く、

「三者樂清淨心。以令一切衆生得大菩提故。以攝取衆生生彼国土故。菩提是畢竟常樂。若不令一切衆生得畢竟常樂則違菩提。」

樂清淨心は、智慧門、慈悲門、方便門の三門の中の、第三方便門に合する。

先ず、論の文を見れば、

以令一切衆生得大菩提故

以攝取衆生生彼国土故

と、「以故」が二度あることに注意しなければならない。

初めは、樂清淨心を通途に約されての説であり、後に別途に約されての文である。即ち、菩提心は一切衆生をして、畢竟常樂たる大菩提心を得しむる所の樂清淨心を内具する。これ安清淨心を更に一步進めたものである。但に衆生の苦を抜いて安穩ならしむるのみならず、更に衆生をして大樂の境に置かんとするのである。然れば、かかる願は、具体的には如何にして成就するのであるか。これ即ち別途の説「衆生を撰して彼の国土に生ぜしむる」ことによりて成就するのである。飢餓に迫る衆生をして其の精力を得しむると云うのが通途の願であれば、これに具体的には、飯食を与えるとか云うのが別途の方便であるように。餓えたる者に金を与えても意味はないが如く、大菩提を得しむると云う通途の願が満足されなければ、彼の淨土に生ずると云うことは意味を持たないし、大菩提を得ると云う願は、事実に於いては、往生淨土と云うこととによらなければ成就しないのである。ここに通別二途を示された所以である。世の若し、衆生を撰取して、淨土に往生すると云う別途の願なくして、一切衆生をして大菩提を得しめんとする願を満足せんとするならば、それは所謂聖道の慈悲であるし、衆生をして撰取して淨土に往生せしむると云うことが大菩提を得しむると云う通途の願を内具しないならば、菩薩の願心はあり得ないであろう。ここに於いて、菩薩は衆生をして大菩提を得しめんと欲す。それ故に要す衆生を撰して淨土に生ずるのである。されば仏土に生ずることは、菩提を得るの方便である。されば、還相の菩薩といえども、具体的には自ら淨土に願生し、その願生淨土を通して一切衆生を撰取して淨土に往生し、その利他の願を満足せんとするのである。

一、論註に云く

「菩提是畢竟常樂。若不令一切衆生得畢竟常樂則違菩提。」

菩提心が得証するものは大涅槃の証果である。涅槃は、所謂、常樂我淨の四徳を円満する仏果そのものである。されば菩薩はこの大涅槃の境に隨順しなければならぬ。故にここにその所隨順を挙げられるのである。「菩提は是れ畢竟常樂の処なり。」菩薩所期の菩提は、畢竟常樂の処である。「処」とはその体即ち畢竟常樂と云うのではなくて、菩提に住すればやがて畢竟常樂を証すと言われるのである。畢竟とは「最後の」と云うほどの意であり、常樂とは常住快樂あるいは、常住大樂である。涅槃の四徳中の二徳を挙げられて、「樂清淨心」の樂が涅槃の大樂を意味することを顯したの

である。涅槃の常楽我浄の楽をにおいて外に、畢竟常楽はない。三界は皆これ虚仮顛倒であつて楽といえども苦である。しかるにかかる永遠の大楽に到る心は、菩提心より外にはあり得ない。この故に「菩提は、畢竟常楽の処」と言われるのである。その意は「菩提は、畢竟常楽を得させる処」と云う義である。

菩薩は、自ら菩提心によつて、大涅槃の法に隨順して、この大楽を得証すると共に、一切衆生をして、この畢竟常楽の処たる菩提心を成就せしめて、やがて衆生をして常楽の境にあらしめんとするのである。かるが故に釈に「若し一切衆生をして畢竟常楽を得しめずば、則ち菩提に違しなん」と言われるのである。眞実の菩提心にあらずば畢竟常楽を得しむることは出来ないし、畢竟常楽を得しめないならば、菩提心とは言われない。

一、「若し一切衆生をして畢竟常楽を得しめずば、則ち菩提に違しなん」

眞実の菩提心は、自利成就して畢竟常楽を得ると共に、必ず利他成就して、一切衆生をして、畢竟常楽を得しめる。若し一切衆生をして畢竟常楽を得しめないならば、それは菩提心ではあり得ないのであつた。

一、次に問題を徴起して云く、

「此畢竟常楽依何而得。」

かかる自利利他一如の畢竟常楽は、具体的には、如何にして得るのであるか。答えて云く

「依大乘門。大乘門者謂安楽国土是也。是故、又言以撰取衆生彼国土故」

彼の弥陀仏の安楽浄土は、大乘門である。その大乘門たる安楽仏国に依つて畢竟常楽を得るのである。

彼の仏国土は大乘門である。既に国土莊嚴十七種中に、大義門功德成就を説いて、

「大乘善根界等無譏嫌名。女人及根欠二乗種不生」

と讃えられてあつた。大乘門とは大義門のことである。浄土の土徳は、浄土それ自体から、女人と根欠不具と、二乗を発生しない。かかる雑悪雑善の差別を発生しないのみならず、女人も根欠も二乗も、浄土に入れば一切を転じて一乗一味たらしめられるのである。これ即ち浄土が大乘門と言われる所以である。

又仏莊嚴功德八種の中には、特に浄土の大衆の上に、仏の功德莊嚴を觀察して、

「天人不動衆清淨智海生」

と偈讚し、これを鸞師は釈して、釈尊等の世界に於いては、大衆の根性欲不同の為、受法不同の為に、仏智慧に於いて若しは退墮して二乗に入り、若しは生死に没在することを示して後「所以興願、願我成仏所有天人皆從如来智慧清淨海生」と云い、海を釈して

「海者言仏一切種智深広無涯。不宿二乗雜善中下屍尸喻之如海」と釈して、彼の仏国には、唯大乘の菩薩のみにして、二乗雜善の屍尸なきことを示された。更に天人不動の不動を釈しては、

「不動者言彼天人成就大乘根不可傾動也。」

と結ばれた。この釈は全く大義門功德の意によられたものである。国土の徳と云うのも、仏徳と云うも、もとより依正不二なるが故に、彼の仏国の大衆は、土徳即仏徳たる、深広無涯底の仏智海によつて、大乘善根を成就して涅槃さながらの徳に生かされるものである。かるが故に、浄土は平等一味であり、大乘一味である。仏徳によつて大衆の功德を成就し、大衆の功德によつて仏国土の徳を顕現するのである。これを以て大義門となし、大義門功德と云うのである。

されば経には、

「彼の仏国土は、清浄安穩にして微妙快樂なり。無為泥オンの道に次し。其の諸の声聞菩薩天人、智慧高明にして神通洞達せり。咸同じく一類にして形異状無し。但余方に因順するが故に天人之名あり。顔貌端正にして超世希有なり。容色微妙にして天に非ず。皆自然虚無之身無極之体を受けたり。」

と説かれる。大乘善根界なるが故に、余方に因順して五乗あるが如く説くも、非人非天、非声聞、非縁覚、非菩薩咸悉く、涅槃の徳(無為泥オン)と相即不離一体の(次し)証果を成就して数量形色を絶したる「虚無之身、無極之体」を成就しているのである。それなるが故に、「清浄安穩微妙快樂」と、その畢竟常樂の境たるを示されるのである。

この故に先に、無上方便を説くに当たつては、「彼の仏国は即ち是れ畢竟成仏の道路無上の方便なり。」と示されたのである。

一、誠に所謂聖道門と浄土門との相違は、ここにあるのである。所謂聖道門に於いては、自ら智慧に依つて此土開覚せんとし、浄土門に於いては、かくの如き大乘門たる³安樂仏国に願生しこれに依つて、仏本願力によつて開覚して、畢竟常樂を得んとするのである。聖浄二門の相違は、全くこれにあつて他にあることなし。

これによつて「是故又言以撰取衆生彼国土故」と結ばれるのである。「又」の字注意すべきである。即ち、天親論主は、樂清浄心を説くに当たつて、

「一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に。衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に。」と二度「故に」と言うことを今「又」言われたのである。還相の菩薩は誠に一切衆生をして、畢竟常樂の大菩提を得しめんとする。しかるにこの願は、具体的には、衆生を撰取して彼の仏国土に往生せしめることによつて成就する。ここに於いて、成仏道は、願生道に転化し、願生道は、成仏道と一致して、眞実の仏道を成ずるのである。

智慧門、慈悲門、方便門によつて、無染清浄心、安清浄心、樂清浄心を成就することを説くはこれ全く成仏道の意である。撰取衆生、生彼国土を説くは、願生道である。願生道にして成仏道の意味を成就しないならば、それは如実の願生道ではあり得ないし、成仏道も願生道とならないならば、眞実には成就しないであろう。眞実に浄土に往生する者のみ、成仏道の因果は成就する。何が故ならば、仏本願力に依るが故である。かるが故に、願生道とは、仏の本願力に信順することである。

一、ここに於いて、

「是名三種隨順菩提門法満足応知」

と結示されるのである。

噫。広大なる哉願生道。久遠劫来迷倒して六道輪廻せる有情は、仏の招喚により、世尊の教えによつて、往生即成仏する。のみならず、生死に還来穢国して、衆生を度せんとする菩薩も亦、実際には、自ら彼国に願生し、それを通して衆生を撰取して浄土に生ぜしめるのであつた。我等は、暗にあつて、遙かに無量光明土に願生の一道をたどりつつ、深く還相の菩薩の意を聞いて、無限の内観の世界につれ込まれるものである。

私は柔軟心の題下に頂いて来たが「柔軟心」とは実に、仏智によつて成就する浄土の意であり、又願生の意であつた。誠に菩提に隨順して衆生と共に彼国に願生せんとする菩提心は、如来浄土の徳によつて、成就する柔軟心であつた。一先づこの講を了ることにする。（完）